

令和6年漁期 イカナゴ新仔（シンコ）情報

令和6年2月29日
香川県水産試験場

1 気象・海象

(1) 水温（図1）

・屋島湾（備讃瀬戸）の水温は、平年値（1991年-2020年の平均値）と比較して、平年並みから、かなり高めに推移している。

・2月24日高松地方気象台発表の1か月予報では、四国の気温はほぼ平年並みと予報されており、従って、今後の水温は平年並み近づくものと考えられる。

(<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/longfcst/kaisetsu/?region=010800&term=P1M>)

・成熟開始のきっかけになると推測されている「水温 20℃」を下回ったのは、11月17日で、平年（11月10日頃）より遅かった。

・夏眠終了が本格化すると推測されている「水温 13℃」を下回ったのは、12月22日で、平年（12月19日頃）並みであった。

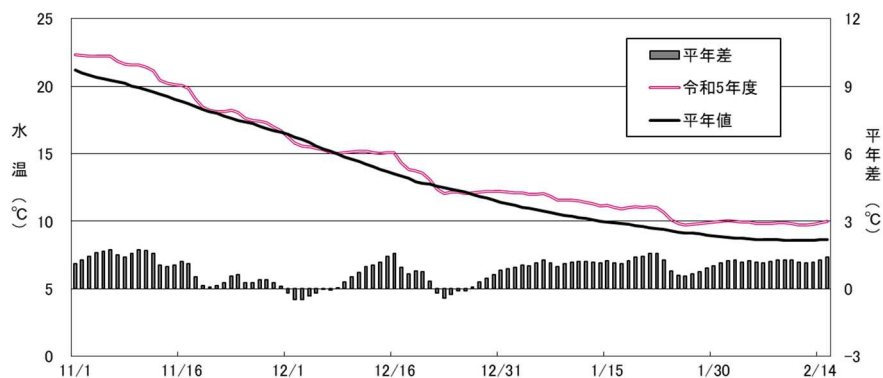


図1 水温の推移（屋島湾水深1.5m, 日平均）

(2) 季節風（図2）

・季節風（特に西風成分）の強弱は、備讃瀬戸から播磨灘に運ばれるイカナゴ仔稚魚の量を左右し、風が強いと分散が良く生残も良くなる傾向がある。

・12月以降の旬別平均風速（西風成分※）は、12月は「平年並み」から「やや弱め」、1月は、「やや弱め」～「やや強め」と推移している。

・なお、ふ化は1月上旬から中旬頃にかけて本格化したと考えられる。

※時間毎の風向データを西成分を1とする西-東成分に変換し、それに風速を乗じた値を平均して求めた（東成分は除く）。平年値：2000-2022年度の平均値。

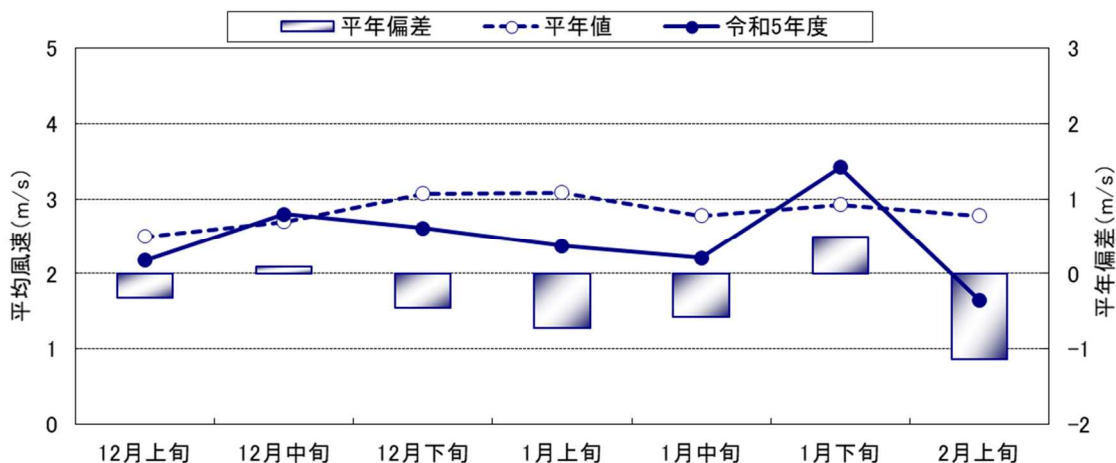


図2 平均風速（西風成分）の推移（高松地方気象台）

2 親魚調査

(1) 親魚密度 (図 3, 表 1)

- ・令和 5 年 12 月 8 日 (1 回目)、25・28 日 (2 回目) の 2 回、高松～庵治地先において空釣こぎによる親魚調査を実施した。
- ・速力 3～5 ノットで 1 地点 5 分びきを原則 3 回ずつ 5 地点 (図 3) において実施した。
- ・魚密度 (空釣こぎ 1 回あたりの採集尾数) は、1 歳魚においては 0.3 尾 (前年 1.7 尾, 過去 10 年の平均 4.1 尾), 2 歳魚以上は 0.03 尾 (同 0.6 尾, 1.0 尾) であり, 1 歳魚, 2 歳魚以上ともに過去最少であった。
- ・1 歳魚の平均全長は 86.6 mm (前年 86.3 mm, 過去 10 年の平均 88.5mm) であった。
- ・2 歳魚以上の平均全長は 134.1 mm (同 124.2 mm, 133.0mm) であった。
- *1 歳魚: 令和 5 年 1 月 1 日生まれを示す。以下同様。

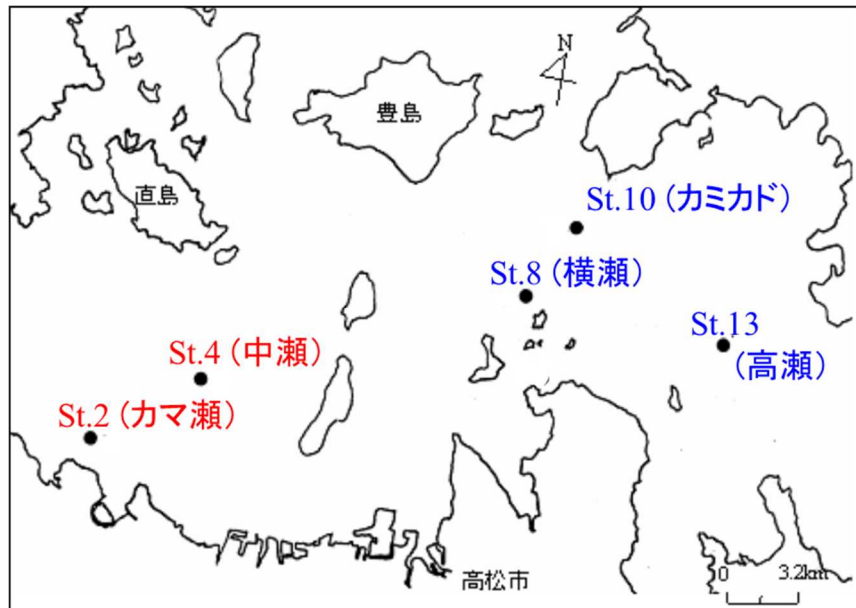


図 3 調査定点

表 1 親魚密度 (空釣りこぎ 1 回あたりの採集尾数)

		1歳魚			2歳魚以上			全体
		親魚密度 (尾/回)	割合 (%)	全長 (mm)	親魚密度 (尾/回)	割合 (%)	全長 (mm)	親魚密度 (尾/回)
今年度	夏季	1.1	100.0	84.9	0.0	0.0	-	1.1
	冬季	0.3	90.9	86.6	0.0	9.1	134.1	0.4
昨年度	夏季	5.1	97.4	80.0	0.1	2.6	138.8	5.2
	冬季	1.7	72.9	86.3	0.6	27.1	124.2	2.3

(2) 産卵期 (図 4)

- ・メス親魚の生殖腺の成熟状況を図 4 に示した。成熟状況は、①未成熟: 生殖腺が糸状で卵黄蓄積が認められない (検鏡によりメスと判別)、②熟卵: 生殖腺が発達中、卵の色調は薄黄色または黄色、③完熟卵: 卵は吸水現象により透明、④放卵済みの 4 段階に区分したが、オス・メス不明なものもあるため、未成熟はグラフには掲載していない。

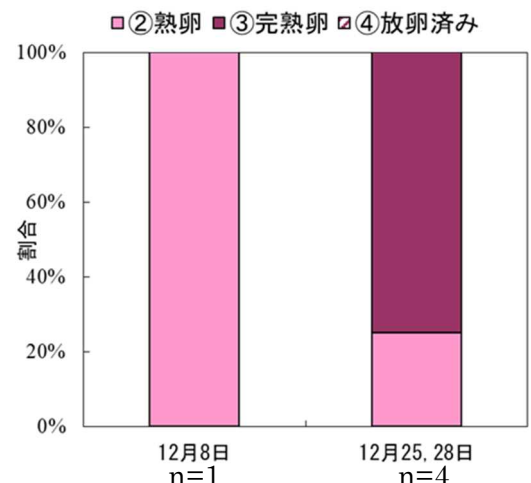


図 4 メス親魚の成熟状況

- ・12月8日は熟卵個体であったが、25・28日には完熟卵個体が75%見られた。
- ・本年度はサンプル数が少ないために注意が必要なものの、生殖腺の成熟状況および水温の動向から12月28日以降の水温低下と共に産卵が行われたと推測された。

(3) 産卵量

親魚密度および1月27日から実施されている込網におけるイカナゴ親魚の漁獲状況(「2月上旬までのイカナゴ(親魚)の漁獲状況」を参照)から、**親魚量は過去最少レベルにあり、産卵量も親魚量に準ずると予想された。**

3 仔稚魚調査

(1) 仔稚魚の出現状況(図5)

備讃瀬戸3定点および播磨灘3定点の計6定点で1月19日、2月8日の2回、ボンゴネット(口径60cm)の往復傾斜びきを実施した。**1月、2月ともに全く採集できず、過去最少となった。**

① 1月後半調査(1定点あたりの平均仔稚魚数)

- ・備讃瀬戸が0尾(前年32.2尾、過去7年平均25.1尾)で、播磨灘が0尾(同1.0尾、4.1尾)であった。

② 2月前半調査(1定点あたりの平均仔稚魚数)

- ・備讃瀬戸が0尾(前年1.9尾、過去7年平均2.8尾)で、播磨灘が平均0尾(同0.2尾、1.5尾)であった。

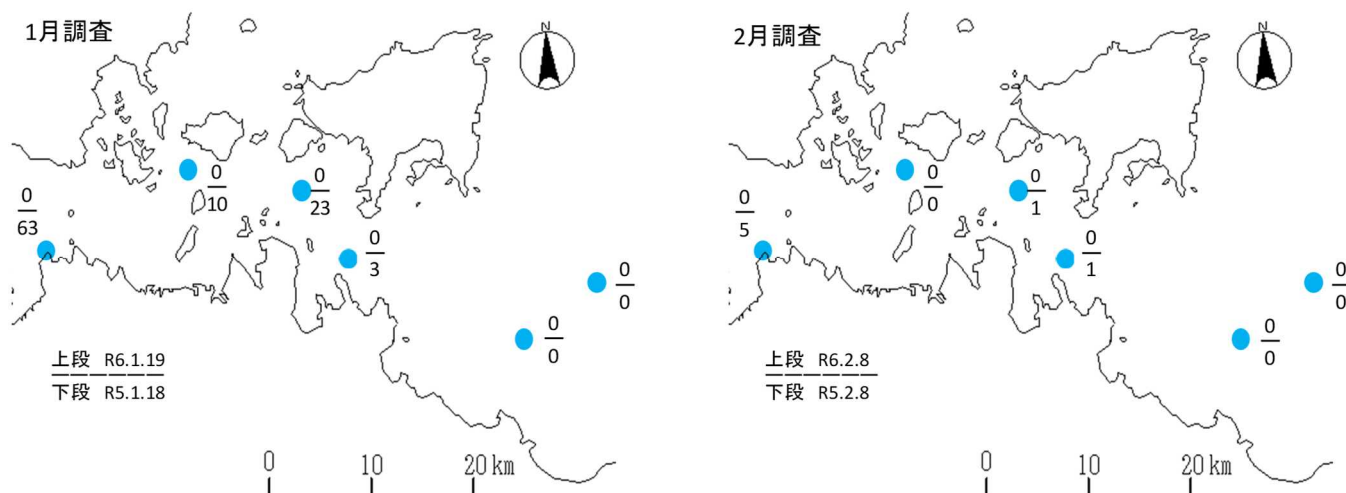


図5 イカナゴ仔稚魚の採集数(ボンゴネット面積1平方mの水柱あたりの尾数)

4 2月上旬までのイカナゴ(親魚)の漁獲状況(いかなご込網漁業)

高松 1月27日から操業を開始したが、親魚の漁獲は見られていない。

庵治 2月9日から操業を開始したが、親魚の漁獲は見られてない。22日からはシンコ漁が開始された。

5 まとめ

- ・親魚調査および親魚の漁獲状況から、親魚量および産卵量は過去最少レベルと推測される。
- ・仔稚魚調査から、仔稚魚の発生状況は過去最少レベルと推測される。

全国的、長期的に見ると、近年、イカナゴの減少傾向が続いている。イカナゴを取り巻く環境は、高水温や貧栄養など厳しい状況にあるが、今出来ることは来漁期に向けて親魚をより多く残すことである。資源量の少ない状況での漁獲は、資源の減少に追い打ちをかけると考えられるため、操業に際しては、終漁を早めるなど格段の配慮が必要である。

【参考資料】

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源研究センターは、備讃瀬戸の広い範囲で親魚調査及び仔稚魚調査を実施している。

詳細については、ホームページに掲載されている次の情報も参照されたい。

https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/result/ikanago.html

※調査 2～4 については水産庁委託事業「水産資源調査・評価推進委託事業」の一環で実施。